連載Ⅱ
当財団専門委員
わたしの１冊
第８回

旅館澤の屋　館主　　澤　功

『Lonely Planet Japan』

Lonely Planet社

宿泊のお客様を尋ねてきたアメリカに住むという若い女性に「澤の屋に欧米のＦＩＴ（個人旅行）がこんなに多いのはロンリープラネットに掲載されているからですよ」と言われて初めてそのガイドブックの名前を知りました。

ところで、チェックアウトするお客様の中で次の人が使えるようにと、ガイドブックを本棚に置いてゆく人がいます。それを集めていましたら、一五〇冊ほどになり整理してみました。

すると「ロンリープラネット」「フロマーズ」「フォーダーズ」「ラフガイド」「ミシュラン」など九五種類のガイドブックがありました。

なかでもロンリープラネットが一番多く、初版から最新版まで揃いました。ロンリープラネットは一一八の国と地域で六五〇のタイトルで発行され、英語による旅行ガイドブックのシェアは二五％で世界一だそうです。

「日本」の初版は一九八一年で、これまで十四版発刊されています。

初版から三版までの著者はイアン・Ｌ・マックイーンで、書籍名は「ジャパン：ア・トラベル・サバイバル・キット」で、冒険旅行的な書き方です。例えば「ヒッチハイク」では、女性でもできるが、若し誘われたら英語が読めない相手に断るための日本文が書かれていて、その中に「西洋の女性も日本の女性とまったく同じで、愛していない男性とはセックスしません」と書いてあります。

この文は、さすがに物議をかもしたようで、二版では抹消されています。そして四版目からは複数の執筆者に交代しました。

六版の裏表紙に、日本語で「特定の団体、企業、機関などについて有利な情報を提示することの見返りとして宿泊料や入場料などの割引または金銭の報酬を受け取るようなことはいたしません」と書かれています。これはユーザーに正確な情報を提供するためのロンリープラネットのポリシーだそうです。

ところで澤の屋の掲載内容を見てみると、二版から掲載され、二、三版では旅館名、電話、宿泊料、最寄り駅だけです。四版から八版までは、これに根津駅と空港からの道順が加わりました。

この頃から改訂版のためにライターの方が調査に来てくれるようになりました。

九版では、家族経営のこぢんまりとした旅館。十版ではＦＡＸ、ホームページ、家族的雰囲気の旅館。十一版では禁煙、下町の家族旅館、小さな庭を見渡せるお風呂場新設。十二版、インターネット、谷中にある経済的な旅館。十三版、Wi-Fi、谷中の貴重な旅館、ロビーに全国のパンフレット棚新設、レンタサイクル。十四版、フレンドリーなスタッフ、伝統的なホスピタリティと、常に新しいそして正確な情報を書いてくれます。

そしてそれが澤の屋の情報としてロンリープラネットの書籍やウェブサイトで、世界に発信されています。

澤の屋が外国人宿として経営してこられたのは、ロンリープラネット「ジャパン」の発刊と受け入れの頃が重なって、そこに掲載され続けたことが大きな要因だと思います。これからも経営を続けてゆくのに大切な一冊です。

（さわ　いさお）

澤功（さわ いさお）

新潟県生まれ。東京相互銀行入行後、結婚に伴い澤の屋の経営者となる。1982年に外国人宿泊客の受け入れを開始。1993年「ジャパニーズ・イン・グループ」会長、1997年（社）日本観光旅館連盟常務理事などを歴任。2003年に観光カリスマに認定され、その後も2007年地域活性化伝道師、2009年YOKOSO！JAPAN大使（現VISIT JAPAN大使）などに任命され、現在も全国で講演を行っている。『澤の屋は外国人宿』（TOTO出版、1992年）、『ようこそ旅館奮闘記』（日本観光旅館連盟、2006年）など著書多数。